



ショートコメント

★★★★

Data 2025-14

映画を愛する君へ

2024 年／フランス映画
配給：アンプラグド／88 分

2025（令和 7）年 2 月 11 日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本：アルノー・デプレシャン

出演：ルイ・バーマン／ミロ・マシャド・グラネール／サム・シェムール／サリフ・シセ／フランソワーズ・ルブラン／ミシャ・レスコー

👁️👁️ みどころ

エジソンの「キネトスコープ」やリュミエール兄弟の「シネマトグラフ」から生まれた映画の発展はものすごい。他方、中学 3 年生から一人で映画館へ通い始めた 1949 年生まれの私の映画愛も相当なものだが、1965 年生まれのフランス人監督アルノー・デプレシャンの映画愛と映画史とは？

彼の映画体験は世代が少し違う私のそれと重なる部分も多いが、11 の章に分けて彼のプライベートな映画体験をさらけ出した本作は、ユニークかつ興味深いうえ、個々の分析は素晴らしい。

映画ファンと自由な映画談義を交わせば、時としてケンカになることもあるが、本作のようなアプローチならそれはなし！本作の鑑賞を契機に、是非多くの友人と映画論議を始めたい。『映画を愛する君へ』というタイトルにも私は大賛成！

◆『映画を愛する君へ』とは何とも魅力的なタイトルだが、それだけでは何の映画か、さっぱりわからない。しかし、チラシに躍る「世界中 50 以上の名作映画をひも解きながら映画への深い愛と映画館への憧れでつづる アルノー・デプレシャン監督の自伝的映画」の文字を読み、さらに「誰しも好きな映画がある そして映画館の思い出がある」、「映画と映画館への憧れに満ちたデプレシャン監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』一僕の人生にはいつも映画があったー」を読めば、なるほど、なるほど……。本作はそんな映画だ。

『ニュー・シネマ・パラダイス』（89 年）（『シネマ 13』340 頁）は映画史上に燦然と輝く金字塔だが、フランスのアルノー・デプレシャン監督の「ニュー・シネマ・パラダイス」とは？1960 年生まれのフランス人監督アルノー・デプレシャンの名前は知らないが、彼にとつての「ニュー・シネマ・パラダイス」は興味深い。

◆パンフレットによると、本作の構成は次の通りだ。

監督アルノー・デブレシャン監督と俳優マチュー・アマルリックのナレーションで物語は始まる。本作は11章立ての構成。リュミエール兄弟による映画の発明に始まり、現在に至るまで、映画界の先駆者たちに触れながら100年を超える映画史が語られていく。そして、映画少年ポール・デダリュスの登場。デダリュスはデブレシャンの『そして僕は恋をする』(96)と『あの頃エッフェル塔の下で』(15)でマチュー・アマルリックが演じた主人公ポールと同じだ。デブレシャン監督が生涯をかけて歩んできた映画人生をポールの成長に投影して、幾多の名画とともに辿っていく。

これぞまさにアルノー・デブレシャン監督の自伝的映画であり、デブレシャンの映画史だ。

◆本作には6歳、14歳、22歳、30歳のポール・デダリュスが登場する。1991年に映画監督としてデビューした1960年生まれのアルノー・デブレシャン監督の、映画を職業とするまでの映画愛は、本作のような形で形成されてきたわけだ。

それと同じように、2025年1月に76歳を迎えた私は、1950年代の後半、小学校3、4年生の頃に両親に連れられて、初めて映画館に行った時のことを今でもよく覚えている。その時に観たのは、中村錦之助や美空ひばりが登場する東映の時代劇チャンバラものだったが、その楽しさはこの上ない経験だった。

私が本格的に一人で映画館に行きはじめたのは、中学校3年生の時、3本立て55円の洋画系と日活系の2つの映画館で、毎週のように一人でスクリーンを観ながら過ごしたことを鮮明に覚えている。本作はアルノー・デブレシャン監督の自伝的映画だが、本作を見ているとついつい、私も私流の「映画を愛する君へ」を語りたくなることが・・・。

◆本作に登場するアルノー・デブレシャン監督の「ニュー・シネマ・パラダイス」は計51本。そのリストは次ページのとおりで。

本作の導入部に『北北西に進路を取れ』(59年)や『恐るべき子供たち』(50年)のシーンが登場してくるのは当然だと納得したが、チャン・イーモウ監督の『妻への家路』(14年)やキン・フー監督の『侠女』(71年)、そして黒沢明監督の『乱』(85年)のシーンの登場にはビックリ！『乱』は当然だとしても、アルノー・デブレシャン監督が中国映画までしっかり鑑賞しており、本作の中にこれを採用していることにビックリ！

List of Mentioned Films

『映画を愛する君へ』に登場する作品たち



ペイジングイン・ア
ストリーム
(1997 / アリス・キウ)



エイジ・オブ・インセンス /
汚れた情事
(1990 / テーディ・シース・コモン)



小さな世界
(1983 / ジェン・ベック・コールド)



仮面 / ペルソナ
(1996 / アンソニー・ホプキンス)



ファントマ 危機脱走
(1994 / アンソニー・ホプキンス)



コットンクラブ
(1984 / フランシス・フォーディ・コッポラ)



ラッシュ・オブ・シンの
列車の到着
(1996 / ヴィニール・エース)



ドラキュラ
(1992 / フランシス・フォーディ・コッポラ)



シャンゼリゼ通り
(1996 / ヴィニール・エース)



北を向いて太陽を取れ
(1990 / アルフレッド・ヒッチコック)



トンネルを抜けて
(1996 / ヴィニール・エース)



叫びときどき
(1992 / イングマルト・ベルグ)



ディアハンター
(1978 / マイケル・チミノ)



カメラを持った男
(1929 / ジョージ・ヴェルトル)



家への家路
(2014 / ケン・イー・ヤン)



ナポレオン
(1927 / アル・バート)



染るべき子供たち
(1990 / ジェン・ベック・コールド)



ロイドの裏心算
(1993 / スティーヴ・ニューマイヤー)



マイノリティ・リポート
(2002 / スティーヴン・ソンドバーグ)



キングコング
(1976 / ジェン・ベック・コールド)



ダイバー
(1998 / ジェン・ベック・コールド)



オーソン・ウェルズの
フォースタッフ
(1995 / ケン・イー・ヤン)



乱
(1985 / 奥津明)



少女
(1971 / キー・アー)



サンジュロ
(1962 / 山本薩夫・東宝)



ハードボイルド
(1991 / キーセス・ビッチャー)



Pompeiiの戦い
(1949 / アル・クレン)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



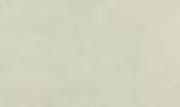
コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)



コンドル
(1930 / ハワード・ホークス)

※ 監 視

◆映画の発明が、エジソンの「キネトスコープ」や、リュミエール兄弟の「シネマトグラフ」にあることを、私は『映画検定・公式テキストブック』（2006年・株式会社キネマ旬報社）で学んだが、アルノー・デプレシャン監督も、11の章に章立てされた本作の最初にそれを紹介しているので、それに注目！当初は1人1人が小さい箱の中で見ていた「動く光」を、1秒間に24コマの真実を伝えるフィルムによってスクリーン上に投影し、多くの観客が一度に見ることを可能にしたのが、映画だ。これによって、新たに映画産業が生まれ、急速に巨大化していくことになったわけだ。映画はそんな動く真実を光によって見る芸術だから、映画館が暗いのは当然。したがって、映画館は、多くの観客が座る広い空間だが、そこに座る1人1人の観客はあくまでパーソナルなもの。

本作によれば、6歳のポールは、映画館のどこに座るかにこだわっていたようだし、アルノー・デプレシャン監督のインタビューでも、「映画館のどの角度から見るのが好きか、好みの座席位置は客席の真ん中か端か、何列目がお気に入りか」等を細かく観客に語らせるシーンが登場するので、それに注目！映画館のどの座席にどのように座るかについての坂和理論にもそれなりのものがあるが、それに照らせば、近時のコーヒーとポップコーンの販売には大きな異議がある。映画館はプライベートな席が確保されたものではあるものの、自宅のリビングルームとは全く異質のパブリックな空間であることを、今時の若者は思い知るべきだ。

アルノー・デプレシャン監督は、「映画館には魔法がある」というテーマで、多くの映画ファンの言葉をさまざまな形に集約しているので、それにも注目しながら、彼の映画愛をタツプリと楽しみたい。

2025（令和7）年2月13日記